

# ～輝きの子育て～

## 「物言えば唇寒し」の世の中

新型コロナ禍で自宅に籠もることの多い日々が続いています。情報は新聞、TV、雑誌、ネットに依存することが増えました。現在、社会を覆っている「物言えば唇寒し」という風潮に危惧を抱いていますので、一言、私なりに意見を申し上げたいと思います。

不注意で、口にした一言が拡大し、袋叩きにされるケースが多く見られます。勿論、公の場での発言には慎重さが求められることは当然ですが、話しの文脈から離れた一部を切り取ったり、単に個人的意見を言っただけで多数の人から集中砲火をあびたり、人格を否定される例は少なくないように思います。

最近、私として納得のいかないことの一つに、ワクチン接種に関することがあります。余ったワクチンを勿体無いからと町長か市長が打って問題になっていました。余った時の処理の仕方を決めておかなかった問題はあるにせよ、行政の責任者が打って何が悪いのか理解に苦しみます。政府の要人や国会議員、警察、消防、教師、保育士等の社会インフラを支えている人達は優先的に打ったほうがよいと思います。どうしてゆとりのない、息苦しい、ひがみ根性が世の中にはびこるようになってしまったのでしょうか。

その要因は、SNSの普及にあると思います。中でも大きかったのは「空気の可視化」です。この現象は日本だけでなく、アジア諸国や欧米でも同様です。海外では「空気」でなく「ポリティカル・コレクトネス（PC）」と呼ばれています。世間で、曖昧にされている「正しさ」なるものの存在を前提に、そこから外れた言動をすれば、攻撃や排除の対象となっても文句は言えないというものです。SNSでは、ある発言がネットで炎上すれば、それが社会的に正しくないことがすぐわかる。ツイート数の大小をみれば、「どれくらい主流からズレているか」「空気がどう変化しているか」が一目瞭然である。

※「空気の可視化」空気を無視した人への攻撃には誰でも参加できる。）

従来ですと、うっかりKY（空気の読めない人）が発言をしても「その場の空気が凍りつく」程度だった。しかしSNSの世界では、それでは済まない。見ず知らずの人まで罵声を浴びせ始め、たちまち熱風として襲ってきます。ネットは社会全体の世論を忠実に映し出すわけではありません。むしろ、少数の「極論」を拡大してみせます。TVを中心としたマスメディアは視聴率を気にしてネット炎上を取り上げます。取り上げる意見が「多数派」だと認識されやすい。すると、自分が違った意見を持っている場合「少数派」だと考えて沈黙してしまいます。自分が多数派だと感じた人々は積極的に発言するため、マスメディアはさらに取り上げようとする。民主主義のもとでのマスメディアは、表面的なネット世論から距離を置き、サイレント・マジョリティの声に耳を傾けるべきだと思います。「声なき声」をすくい上げるのも必要だとも思います。

「正しさ」は一つではありません。メディアに表われる意見が一色になる時、民主主義は危機に瀕しているのです。現在のメディアは多様性の尊重を声高に呼びながら無自覚に多様性を窒息させつつあるのではないだろうか。私達は「自分でものを考える」習慣を常日頃、培って行く必要が大事かと思えます。

片野 英司

※ 本稿は「クワイテリオン2021年5月号」記載の報道イノベーション研究所 松林 薫氏のSNSがもたらす「沈黙の二重螺旋」によるところであります。